④佐藤　政信氏
（東日本大震災仙台沿岸災害伝承プロジェクト語り部、元高砂一丁目公園仮設住宅自治会長）　～自助と共助、平時に正しい知識を～

中野地区は 4 町内、約 1,000 人が生活していました。震災前から地震訓練には力を入れていましたが、マニュアルでも想定していなかった津波がきて、地区のほとんどが流されました。約 600 名が助かりましたが、300 人近くの方が犠牲になりました。小学校の屋上で一晩過ごし、次に移った避難所でも人がいっぱいで横になれない状態が続きました。布団がないのでダンボールで 1 カ月過ごしました。避難所では町内でまとまって生活していましたが、毎日が安否確認でおわれました。そして避難所だったため葬式もあげることができない状況でした。

ようやく仮設住宅ができ、同じ町内が同じ仮設に入る形で進めていきました。夏の暑さや結露等仮設の設備状況はあまりよくありませんでしたが、少しずつ改善していきました。住民同士の声かけ、挨拶が一番大事で、七夕やクリスマス等笑顔が出るような催しをしていきました。また、花・野菜の栽培なども行っていました。

住んでいた地区が災害危険地域に指定された関係で、土地の売却が難しく、移転地での生活の目処がたちませんでした。災害には保証がなかったため、仙台市は借地化などの対応を取ってくれましたが、子供や孫等の世代に負担がかかるため、自分の家の建設は難しく、災害公営住宅へ入居する人が多くいました。

多くの犠牲者がでました。避難方法が間違っていたのかもしれません。なぜならば、一家でまとまって亡くなった人が多かったからです。家族で話し合って、自分の命は自分で守る、バラバラに逃げるということが進められています。同じく、15 分ルールというものも進められています。町内会、行政、消防などが 15 分だけ声かけをして、後は自分の命を守るために避難するというものです。

住んでいた地域の人がバラバラになり、元の場所に移れなくなったため、昔の町内の人が自分達の元の暮らしを伝える「中野ふるさと学校」という活動をしています。ジオラマや地形図の作成などです。その一つの日和山は、震災前は 6.5m で、当時日本一低い山で有名だったものです。その後天保山に抜かれたのですが、津波で 3m になり改めて日本一低い山として国土地理院に認定されました。これは後世に伝えていかねばなりません。

今一番取り組んでいるのは中学生を中心とした防災のあり方です。中学生が参加するということは親も参加するということで、学校でも授業の一環としてやってくれています。子供の頃からの防災教育が大切で、高校でも防災科ができてきています。今後、町内を挙げて防災に対する認識を高めないといけません。